



Title	中国哲学史研究ノート〔三〕
Author(s)	加地, 伸行
Citation	中国研究集刊. 1986, 3, p. 66-70
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/60921">https://doi.org/10.18910/60921</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 中国哲学史研究ノート 〔三〕

加地伸行

論考のあり方を主題とするこの研究ノートを書き始めてから、両様の反応があった。

一つは、そういう内容が続けることは、院生相手となり、雑誌の内容低下につながるのではないか、という厳しい批判である。すぐれた研究者からの批判であり、私としては謙虚に受けとめたい。

同氏はまたこういう批判を呈された。論文は、書きたいという気持があれば書ける、と。

まさにそのとおりである。書きたい、表現したいという内発する〈熱気〉があれば、書ける。確かにそのとおりである。

しかし、それは、やはり同氏が研究者としてすでに完成しているからそういうふうに言えるのではなからうかと考える。

と言うのは、まったく逆の反応もあったからである。すなわち、それはまさに、或る院生のものであった。

その院生は、或る大学院の在籍者であり、私とはまだ面識は

ない。たまたまこのノートを読んだことが機縁で、私に手紙を寄せてきた。

その手紙を読むと、私には、同君の〈熱気〉が伝わってくる。学問への熱気には、先輩も後輩もない。その点では、同君に対して敬意を表するに吝さかでない。

しかし、同君は同時に悩みを述べる。結論を言えば、要するに、壁につきあたっている状態である。何の壁かと言えば、方が定まらない、という壁である。

と書けば、大方の研究者は嗤うことであろう、どうしていいのかわからない、などという情ない者には研究者の資格がない、と。

その批評は正しい。研究は厳しいものであり、落ちこぼれてもそれはしかたのないことである。

しかし、私はその院生を嗤うことができないのである。どうしていいのかわからないという悩みを持つことが、何の悩みも持

たないことよりも果して劣っていることなのかどうか、簡単に決めることはできないと思うからである。

研究者は機械ではない。人間探求を志す哲学という領域に身を置く人間には悩みがあってもかまわないと思う。

もちろん、その悩みの内容が問題である。たとえば、このごろ、人生の目的をばへ研究職につくことへもつとありてい言えへへ大学の教師になることへだけとしているような、志の低い連中がいる。そういう連中の低俗な悩みなど、聞きたくもない。研究者を志した以上、仕事の目標を定め、その仕事を完成することに人生の目的を置くべきである。そういうことに直接関わるような悩みの場合であつたならば、私は決してむだではないと考える。

話をもとにもどすと、さきほどの院生の場合、目標を設定しておりながら、どういう順序、どういう方法で、そこに近づいてゆけばよいのか分らないという悩みである。私は、同君に返書を書いた。それは、同君に対してへ教えるへというような立場からではなくて、私の経験を語るといふものであつた。

同君の場合、熱気はあるが段取りの計画や技術がない、ということである。あるいは「眼高手低」に近いものである。ちなみに、始めに引いた某氏の場合は、熱気とともに段取り・技術が備わっているということになろう。

熱気を失なつては、研究者としてなにか欠けるということになる。熱気を常に持続する研究者でありたい。しかし、その熱

気が噴火し、迫力ある溶岩流となつて一気に山を下ってくるために、やはり段取り、技術が必要であらう。

× × ×

論文と言っても、やはり規模に大小がある。最も分りやすい例で言え、作品論的論文、作家論的論文、総括論文（仮称）、といった三種であらうか。

この三種は、いわば、段階を作つていて、しかも相互に関わつている。端的に言え、作品論的論文のいくつかを構成して作家論的論文ができ、作家論的論文のいくつかを構成して総括論文ができる、と私は考えている。

総括論文という意味は、或る大きな主題を持った論文のことを意味する。或る特定時代の思想史の研究や、或る特定主題（たとえば「仁」）の研究といった、大がかりな専論のことを指して、仮に総括論文と言つておこう。好例としては、博士論文などがその一種である。ただし、私は、あくまでも主題の専論を指して総括論文と称しており、多方向にわたる諸論文を排列した、いわゆる論文集のことを意味しない。

私は、この三者を内容的優劣という序列として見ない。この三者を規模の大小という序列としている。具体的に言えば、学士論文（いわゆる卒業論文）は、一つの作品を徹底的に読みこみ、その作品それ自身から、なにかを導き出してくるというしかたである。

こうした作品論は、研究者の生活を通じて、何度もそして常

に書くことになる。作品論は総括研究の基礎である。そのモデル、あるいはその習作が学士論文（卒業論文）であると考えている。

これに対して、たとえば、修士論文は、一人の作家を取り上げる作家論が適している。一人の作家の主要な作品をいくつか検討し、（つまりは作品論を基礎にして）その総合化の中から、なにかを導き出してくるというしかたである。

こうした作家論は、規模をいくらでも大きくすることができよう。だから、作品論の連作の中から、作家論を生み出してくるとき、その力量は、基礎となる作品論の出来不出来に比例するであろう。

もちろん、修士論文として作品論となる場合が当然ある。たとえば、『史記』のような大作を対象とするとき、『史記』全体の研究自身が、作品論であり、同時に作家論となる。

しかし、私は、『史記』のような大作の場合、その内部の一篇、たとえば「孔子世家」一篇を一つの作品として、その作品論を書いてよいと思っている。『史記』全体を対象とするのは、学士論文作成の時間的制約から言って困難である。

総括論文の場合は、大きな課題を取り上げるためそこに体系性が求められよう。またその内容は、或る作家論を拡充することであろうし、あるいは、多くの作品論や作家論を作成してそれを土台とすることもあるだろう。

もちろん、こうした論文が作られてゆく基礎として、諸種の

報告が多数作られてゆくことは言うまでもない。

私は、前引の某君に対して、もし行き詰ったときには、作品論を書きなさいと勧めた。作品は無尽蔵であり、そして作品研究、作品論は総括研究の基礎となるからである。作品論を十分にこなすことができないで、どうして作家論や大きな課題の研究ができればか。

もっとも、これまでだれも手をつけたことのないような作品の研究は、初心者にむりである。これは逆に経験豊富な研究者向きである。

手をつけるのに向く作品とは、すでに一定の評価を得たものである。その一つの目安は、たとえば『四庫全書総目提要』などすでに解題がある作品である。

私は、たとえば『総目提要』の評価を前提として、そのあと正負の二元的方向で考えることにしている。簡単に言えば、『総目提要』の評価を追ってゆく方向と、その批判という逆方向との二つである。そういう目で見ると、作品分析の主題はいくらでも転っている。

あるいは、同時にたとえば邵懿辰の『四庫簡明目錄標注』あたりを見ると、報告として文献問題についてまとめて見たいという欲求に駆られることであろう。

作品論は総括的研究の基礎である。研究者の論文の相当の多くは作品論である。その意味では、研究者を志す場合、学士論文は習作の絶好の機会となる。

## 編輯後記

\*執筆者紹介。橋本高勝氏は京都産業大学教授、塩出雅氏は武庫川女子大学等非常勤講師、滝野邦雄は大阪大学大学院（博士課程後期）学生、岸田知子氏は梅花女子大学等非常勤講師、ジョンメイカムは大阪大学大学院研究生、竹田健二は大阪大学大学院（博士課程前期）学生、若槻俊秀氏は大谷大学教授。

\*ジョンメイカムは、オーストラリア国立大学の修士課程修了後、昭和六十年四月、国費留学生として来日、二年間在籍の予定である。中国大陆・台湾ともに長期滞在の経歴があり、中国語はきわめて堪能である。易に関心を抱き、山口久和氏（大阪市立大学）に御指導をいただいて今回の成果となった。山口氏に感謝申しあげる。

\*昨年、本研究室の森三樹三郎・大阪大学名誉教授はめでたく喜寿を迎えられた。その祝賀の一つとして、近く同朋舎出版から『六朝士大夫の精神』を刊行することとなった。そこで森先生の受業生の代表として、若槻氏に紹介をしていただいた。森三樹三郎先生のますますの御壮健をお祈り申しあげる。

\*本誌もようやく第三号を刊行でき、内容も充実してきた。東方書店、朋友書店、山本書店、横田書店、北九州書店を特約書店として市販することになっている。五十人ほどの購読者の方があり、感謝している。引き続き御購読をお願い申しあげるとともに、紹介者の必要はないので、御投稿をお待ちしている。

そのように、本誌は門戸を全国に向って開いており、編輯方針は、論文に限らず、印刷しにくいものや報告類をも歓迎するという立場をとっている。本号で言えば、塩出氏の補論は、表が中心であり、ふつうでは発表場所の困難な例である。

なお、学界には、短い論考を載せない傾向がある。五十枚とか三十枚といった、いわゆる常識的枚数というものが存在する。しかし、商業的原稿で制約のある場合以外、枚数の多寡は本質的なことではない。いたずらに長編で内容空虚なものよりも、短篇ながらも歴史に残る秀作のほうが大切である。本誌は枚数の多寡は問わない。意を尽したものを望むのみである。

\*昭和六十一年五月二十八日早朝、田中利明氏が逝去された。享年五十一。慈教院釈證明。田中氏は大阪学芸大学卒業後、昭和三十七年三月、大阪大学文学修士、昭和四十一年三月、大阪大学大学院博士課程退学、寝屋川高等学校勤務等を経て、大阪教育大学教授の職にあった。主として唐代の思想史を研究しておられた。

五月三十日の葬儀当日、西田文夫・大阪教育大学学長、佐藤虎男・大阪教育大学教授（国語科教室代表）に続いて、友人代表として、橋本高勝氏（昭和四十三年、大阪大学大学院博士課程退学）が弔辞を読まれた。

ここに橋本氏の弔辞を録し、もって本研究室として深く哀悼の意を表し申しあげる。

甲辞。謹んで故田中利明君の御霊前にお別れの言葉を申します。こう云わねばならないとは実に悲しい。

君はかねてより俺の故郷、東北の片田舎に行ってみたくて強く望んでおられた。昨年の秋はその約束のときであった、が、君は思わざる病に倒れ、ご家族の深く祈る思いにもかかわらず、帰らざる旅の客となられた。享年五十一。君の命を奪い、不帰の旅路につれ去ったその病をにくむ。

思えば君の立居振舞は常に端正であった。それが君の、人生を考え、社会をみつめる真摯な態度に根ざすものであることはいうまでもない。君はまた中国学の研究においてもその真摯な態度で地道に着実に努力してこられた。それを中途にして旅立たねばならなかったこと、利明君、本当に残念であろう。まして不本意にも奥さん、お子さんとの別れ旅となったこと、これには胸もはりさげんばかりであるにちがいない。

今となってはどんな言葉もむなし。ひたすらご冥福を祈るばかりである。利明君、お願いする、奥さんには悲しみに耐え

抜く力を、お子さんには進み行く道に光を。

一九八六年五月三十日

友人代表 橋本高勝

\*田中さんは、本研究室の古い出身者である。昨年、本誌地号を謹呈したとき、そのお礼状にこういうおことばがあった。「雑誌刊行費用を早く負担させて下さい」と。

本誌刊行に物心ともに苦勞している私にとって、このおことばは非常に嬉しく、かつありがたかった。おそらく、田中さん御自身に、雑誌刊行の御経験があたりだったのであろう。

昨年八月下旬、田中さんと、二度、電話で長く話したことがあった。あのとき、二人でいっしょに腹をたてながら話したことは、今はもう私一人の胸の底に残るのみである。

その後、九月下旬、突如入院し手術を受け、意識不明のまま帰らぬ人となった。  
(加地伸行)